

2021年9月19日 半田朝礼拝

午前9時・午前10時30分

司会 大谷京子

奏楽 鬼頭容子

前奏

招詞

イザヤ書 第49章8節—9節

讃美歌

讃美歌 21-208-1 (主なる神よ、夜は去りぬ)

交読

詩編 第47篇 (p. 51)

祈祷

聖書

マルコによる福音書 第14章43~52節

(新約 p. 93)

讃美歌

讃美歌 21-55-1 (人となりたる神のことば)

説教

「おびえから解き放たれて」

新約聖書の最初の三つ、マタイ、マルコ、ルカそれぞれの福音書はとてもその記事が似ています。その中でも、マルコによる福音書が最初に書かれたと考えられ、マタイやルカにと

ってマルコはとても大切な参考書になったようです。マタイもルカも、マルコ福音書を側に置いて、自分たちが書く福音書の枠を整えて、そして更に自分たちが知っている、いろんな資料から追加しながら、少しずつ変えてそれぞれの福音書を書いたのだと考えることができます。特に今わたしたちが読んでいるイエスさまの受難の記事は、この三つの福音書がとても重なる部分が多いところです。

ところが疑問が出てきます。では、重ならないところが出てくるのはどうしてか。今日の聖書箇所と言えば、51節と52節です。ここは、マルコだけです。だとすると、マルコ福音書にとっては、大事な箇所だったかもしれないが、マタイやルカにとってはそうではなかった。更にいろいろな推測をする人がいて、多分これは、ローマの教会の人たちが、ここに登場してくるあの裸で逃げたあの若者は、ああ、あの人のことだ、と誰もが知っていた人のことではないか。だから、マルコはこの箇所を特別に付け加えたのではないか。そう考える。そうする

と、ではこの若者は誰か。これもいろいろな推測があるようですが、その一つに、このマルコによる福音書を書いた本人が、ここに自分をひょいと登場させたのではないか。さらにこのマルコは、イエスさまが最後の晩餐をなさった二階座敷を提供してくれた家、これがのちに、エルサレム教会の一つの集会の場所になったようで、これがヨハネ・マルコと呼ばれる青年の家だった。そして集会のため自分の家を提供するようになった。あるいは、このマルコは使徒ペトロの通訳者として同行し、言い伝えによれば、ペトロと同じように、迫害の時に殉教の死を遂げた人ではないかと、考えられているようです。

さらに不思議なことは、「素肌に亜麻布をまもってイエスについて来ていた。人々が捕らえようとする、亜麻布を捨てて裸で逃げた」ということです。今で言えば、寝間着を着ていたと考えればいいようです。では、どうして寝間着だったのでしょうか。これも推測ですが、もし正しいとすれば、イエスさまと弟子たちが晩餐後にゲッセマネの園に行かれた。

マルコはもう寝るつもりで寝間着に着替えて、寢床に入っていたかもしれない。ところがイエスさまが弟子たちと一緒に出て行ってしまふ。いつもと様子が違う。いったいどうしたことだろうと後をついて行くとゲッセマネの園で、イエスさまと弟子たちのやり取りの一部始終を聞くことになった。そこに思いがけない捕り物が始まってしまつて弟子たちは逃げ出し、自分も一傍観者だと思つていたが、人々が自分のところにもやってきて捕まえようとした。だから慌てて亜麻布だけ掴まれて振りほどくようにして逃げたために、裸で逃げる羽目になつてしまつた。おそらく、そういう話が伝えられていたのではないか。マルコのことをよく知っている教会の中で語り伝えられ、その話になると、きっと、ああ、あの先生のことだね、いかにもマルコ先生らしい事件だつたね、というような反応がかえつてきたのかもしれない。ただ、単におかしな話、ちょっと笑えるような話なら、こんなにも大切に、伝えられたかどうかは分かりません。裸になつてでも、いささかかっこ悪い姿であっても、他の弟子たちと同じように、イエスさまを捨てて逃げたことに

は変わりありません。けれど、この人がやがて、伝道者になって、そして今度は逃げないで殉教者になったということを、きっと教会の人たちは何度でも思い起したのだろうと思います。そして、イエスさまがなされた不思議なみわざを賛美したのかもかもしれません。

こうしたことは推測でしかありません。ただ推測ではないことがあります。それは、イエスさまがゲッセマネの園でとらえられる話を聞いても、それは、どこか、自分たちとは関係のない話として聞いたのではなくて、今ここでも、自分たちに起こり得る話として聞いただけだろうということです。これは、このわたしをも捕えようとする力がもたらした、大きな出来事なのだということを、人々が知っていた。そして、そこで主イエスを信じて、喜んで、この出来事を伝えた。そうでなければ、この出来事が、わざわざ福音書に書かれて、今のわたしたちに伝えられるはずがありません。

さて、どうして若者は逃げたのでしょうか。それは、こわかったからです。怖いから逃げる。弟子たちもそうです。捕らえられるというのは、怖いです。遊びと分かっている鬼ごっこでは、捕まるのは嫌ですよ。どこか小さな恐れがあります。たとえ冗談でも誰かに怖い顔をされてつかまりそうになれば、身体が引けます。人には、そういう恐れの本能があります。捕らえられて自由がなくなる。捕らえられて命の危険にさらされる。わたしたちを今、直接の暴力を受けることは少ないかもしれませんが、思いがけないところで、捕らえる力は至るところにあります。今のわたしたちには、病気が身近かもしれません。思うようにならなくなり、跳ねのけることができないほどの力、自分を追い詰める社会の力もそうです。何としてでも、裸になっても逃げたいと思う。この若者の姿は、そうした、恐れの中の現れだったかもしれません。

しかもそれだけではありません。この聖書は礼拝の時に、読まれたかもしれません。聖書が今のようにまとまるのは

まだ先のことですし、一人一冊持つような時代はさらに遙かに先のことです。そうすると、43節以下は、ひとつのまとまった出来事として、繰り返し朗読されたかもしれません。

「さて、イエスがまだ話しておられると、十二人の一人であるユダが進み寄って来た」とあります。ここで少しおかしいな、と思われるかもしれません。というのも、ローマの教会でマルコ福音書の言葉が、繰り返し語り始められた最初の頃は、まだペトロがそこにいたかもしれません。あるいは他の十二弟子の誰かが居たかもしれません。そういうところで「十二人のひとりであるユダが」と語り始めます。場合によっては、いやいやユダは十二人の弟子ではない。もう、そこから出て行ったのではないか。あの時は、もう出て行って、われわれの間ではなくなっていた。そう言って、ユダと自分たちとを切り離すことだってできたかもしれません。でも、教会では大事にされてきました。この文章の中から、ユダの名前が消されることはありませんでした。ペトロも、他の弟子たちも、それを消す

ことなどできないと思ったのではないのでしょうか。それは、ユダも自分たちも大して違わないということです。

ユダは、ここでわざわざイエスさまに接吻します。どうしてか。一つはこうです。時は夜です。もしかすると月が出ていたかもしれませんが、騒動の中で、誰がイエスなのかは見つけにくい。だからイエスさまの顔をよく知っているユダが、わたしが接吻した、その人を捕らえれば間違いはないとしたのです。44節と45節の両方に「接吻した」とありますが、元の文章では少し違っています。何が違うのかと言えば、45節では丁寧な接吻、心を込めて接吻した、ということです。自分の先生に対して尊敬と愛情を表す時にするしぐさを、ここでユダはやって見せた。弟子たちが皆やっていた挨拶を、ここでユダもして見せた。見た目には変わらない敬愛のしぐさが、イエスさまを裏切ることになる。とすれば、他の弟子たちは、そのユダのイエスさまに対する丁寧な挨拶に、自分たちのイエスさまに対する思いを重ね、そして、その自分たちは、そのイエスさまと

逮捕する人たちをその場に置き去りにして逃げ出してしまったのだ、ということを生涯忘れることはできなかったと思います。

繰り返しますが、どうして逃げたのか。弟子たちも怖かったのだろうと思います。他にもそうです。そこに居合わせた人たちの中のある者が、大祭司の手下に打ってかかってその耳を切り落としたとあります。おそらく剣を抜いた人は、イエスさまを守ろうとしてというよりも、よほど慌てていたのかもしれない。怖くて剣を抜いた。そして、イエスさまを捕らえに来た人たちも、武器を整えていた。どうして武器を持っていたのか。やはり怖いからです。相手を威圧するためだけではなく、自分に恐怖心があるから。そうすると、恐れに満ちた人たちがイエスさまの周りにいたのだということになります。

そこでイエスさまが言われたのはこうです。「まるで強盗にでも向かうように、剣や棒を持って捕えに来たのか。わたし

は毎日、神殿の境内で一緒にいて教えていたのに、あなたたちはわたしを捕らえなかった」です。「強盗」とは、力づくで自分の思いを果たそうとする人という意味です。だとすれば、そんな人に対して誰もが恐れを抱きます。自分の身を守るために武装しなければいけないと思ってやって来た。ここでイエスさまの周りを囲む人々は、闇に乗じて自分の思いを果たそうとする。けれど、イエスさまは闇の者ではありません。明るい光の下で、ただひたすら神の教えを説きました。その光の中にあるイエスさまを、人々は捕らえることができなかった。やはり、そこにも恐れがあったのかもしれない。そうした恐れに捕らわれている人々の中であって、けれど、イエスさまご自身は力を振るわないために、捕らえられてしまわれる。しかも、「これは聖書の言葉が実現するためである」と言われる。どの聖書の言葉が実現したのかと思います。これだと特定するよりも、ここはやはり、聖書が語る神のみこころが実現するためです。ここで行われているのは、神のみわざです。神のみわざがここで貫かれている。だからここでイエスさまは、わたしは、その神

のみわざに生きると言われるのです。

このマルコによる福音書がローマの教会で読まれた時、おそらく迫害の下から逃れて聞いている人たちもいたはずで
す。そうした時に、この箇所が読まれるのを聞きながら、どんな
思いがしただろうかと想像します。おそらくそこにはいつも、ある
恥ずかしさを覚えながら、聞いたのではないか。これはペトロ先生
だけの話ではない、マルコ先生の話だけではない、これは、わたした
ち皆の話だと思いながら聞いた、あるいは朗読しただろうと思いま
す。そしてこの話を繰り返し聞くことを何よりも喜びとしたと思いま
す。

どうして喜びとしたのか。讃美歌を一つ紹介します。「神はわがやぐら」で旧讃美歌の方が歌いやすいのですが、歌詞は讃美歌 21 の方（377 番）が作詞をしたルターの思いをよく伝えているように思います。今日のこの聖書箇所にかぶる内容の歌詞です。二番の歌詞はこうです。「打ち勝つ力は われらには無し。力ある人を 神は立てたもう。その人はキリスト、万軍の

君、われと共に たたかう主なり」。

これはルターが作った讃美歌です。まるで自分のことを歌っているようです。もしかすると、自分は、神さまのために戦えると思っていたのかもしれませんが。ところが実際は何もできない。そんな力は自分には無いことに気がつきます。ただ一人だけ戦ってくださる方がいた。神が立ててくださった方だ。そのおかげで、自分も一緒に戦うことができる。それはキリストだと歌います。わたしたちはこの讃美歌をどのように受けとめるでしょうか。もしかするとわたしたちは、こう感じているかもしれません。

今生きているこの世の中で、自分たちこそが苦しんで悲しんで生きている、戦っていると思い、苦悩の色を滲ませながら生きている。ところが、自分たちの無力さを嘆かずにはいられない。あれもこれもしなければいけないのに、あれもこれも言わなければいけないのに、と思いながら、そのすべてができない。勇気を持ってない。だから、自分自身の弱さを悲しんで深

刻な顔をしてはいないだろうか。そういう顔をすれば、自分たちこそが誠実であるかのように思えるのだろうか。

けれどこの讚美歌はそうは歌わない。どうしてか。それは、わたしたちはひとりで戦うのではないから。むしろ、すでに勝利しておられる主イエスが、一緒に戦ってくださるからだ。

わたしたちはこの聖書箇所を喜んで聞けるでしょうか。おそらく若者は、闇にまぎれて逃げたはずです。息を切らせながら逃げたと思います。裸であることも忘れて、暗闇の中にうずくまって、「ああ、助かった」と思ったはずです。けれど、そこで神の声を聞きます。そこから出ておいで。わたしは、あなたを選んだ。あなたが選ばれた姿を見て、皆が驚き、そして神の恵みの出来事が起こったことに気がつくだろう。そう語りかけられたらと思う。

イエスさまは自分を放り出して逃げた弟子たちや、慌てふためいて、裸で逃げた若者を、捕えなおしてくださった。そのようにして、ひとりひとりの心の中から、恐れへの不安に捕らわれている心を取り除いて下さった。だから、ここでは裸で逃げた若者が、後に、主に従って生きることを喜んで受け入れた。彼は、勇敢な英雄になったのではありません。ただ、主イエスに仕えるという喜びと、主イエスについて行くという、そのことだけの中にある力と、慰めとを知る喜びに生きることができました。

わたしたちもまた同じように、おそれから解き放たれて、許される限りの、神のみわざに生きることを幸いとしたいと思います。ローマの教会の人たちは、ここでの出来事を何度も聞きながら、それに導かれて解き放たれていきました。お祈りいたします。

迫害の地で、殉教に直面するようなところで、教会はと

でも小さく、いつもおびえながら、けれど、いつもそのおびえから解き放たれて、あなたの恵みを語り続けて生きてきました。そんなふうにして始まった教会の歩みを、わたしたちも受け継ぎます。毎日の生活の中で、大きな恐れが、小さな恐れが、わたしたちを思いがけなく襲います。逃げてしまうこともあります。けれどそのようなわたしたちを、あなたは見捨てず、共にいて恵みを告げる者としてくださることを何よりの喜びとさせてください。主のみ名によって祈ります。アーメン

讃美歌 讃美歌 21-510-3 (主よ、終わりまで)

献金 讃美歌 21-65-2

報告 週報の3頁を御覧ください。

祈 禱 それぞれの場で黙禱をお願いします。

主の祈り 讃美歌 21-93-5 A(天にまします我らの父よ)

祝 禱 平和のうちに、この世へと出て行きなさい。

主なる神に仕え、隣人を愛し、
主なる神を愛し、隣人に仕えなさい。
主イエス・キリストの恵みと、父なる神の愛と
聖霊との親しき交わりとが、
あなたがた一同と共にあるように。 アーメン

後 奏

<礼拝終了>